三鷹市立高山小学校　令和8年度【　算数　】科　授業改善推進プラン

	前年度授業改善推進プランの検証	学習状況の現状と課題	指導方法の課題と授業改善策
第1学年	○文章題では、「あわせて」や「のこりは」といった演算決定のキーワードを意識させることで、正確に立式できるようになった。 ○キーワードがない文章題については、場面を簡易的に図示するよう指導した。しかし、ブロック等半具体物の操作をしないと正確な立式ができない児童がいた。 ○毎日ミライシードで宿題を出し、正誤判定がすぐに出ることから、効果的な学習につながった。	○具体物の操作や学習用タブレット端末上でブロックを操作する活動等を繰り返し行い、数の概念理解を深めることができた。 ○たし算、ひき算の学習は、学習用タブレット端末や計算カードを活用した計算練習をペア、個人で繰り返し行うことで、定着した児童が多かったが、具体物や指を使わないと正しく計算することが難しい児童も一部いる。 ○５や１０の合成・分解はある程度定着しているが、「５は２と□」や「さくらんぼ」の形のように出題形式が変わった場合に対応できず、間違えてしまう児童が多かった。 ○文章題では問題をよく読むという点に課題があり、立式や演算決定の場面での間違いが多かった。	○児童の実態に合わせて、ブロック等の具体物や学習用タブレット端末を使って操作しながら考える場面をつくり、数の概念の確実な定着を目指す。 ○ゲームや様々な活動を通して繰り返し計算をさせる中で、指やブロックを使わなくとも徐々に素早く正確に計算できるよう、反復練習の機会を意図的に設ける。また、ペア学習を取り入れることで正しく計算ができているか児童同士で確認し合えるようにする。 ○様々な形の発問にも対応できるよう、いつも同じ型ではなく問いかけの仕方を変えていくことで、より確実な理解を目指す。難易度を変えた様々な練習問題に取り組み、定着を図る。 ○文章問題では、読み飛ばしをすることで誤答につながっているケースが多いため、まず、「聞かれていること」を初めに確認し、答えるべきことと単位を確認するように指導する。その後、「あわせて」や「のこりは」など、演算決定をする際のキーワードに線を引き、正しく演算決定をできるようにする。
第2学年	○ICTも使いながら、たし算やひき算の基礎的な学習を反復し演習することで、力をつけることができた。 ○自分の考えや計算の仕方を図や言葉を使って説明することに課題がある。 ○問題場面を具体物で提示したり、図を使って表したりして具体的にイメージする習慣を身に付けさせる必要がある。	○ミライシードやドリルなどでの復習を通して、たし算、ひき算の基礎的な力は概ね身に付いてきているが、個人差が大きい。 ○自分の考えや計算の仕方を、図や言葉を使って説明することが苦手な児童が多い。 ○文章問題を正しく読み取り、立式することが苦手な傾向がある。 ○「単位(cm、mm、L、dL等)」について、単位換算や長さの量感が定着していない。 ○時刻は読めるが、●分後、●分前、●時間後、●時間前などの時間の感覚が十分身に付いていない。	○問題場面を図で表すことで、具体的にイメージする習慣を身に付けさせる。 ○文章問題から「分かっていること」や「聞かれていること(答えること)」などを正確に読み取れるように、下線を引いたり、キーワードを掲示したりする。また、児童自身でも下線を引くことができるように指導する。 ○全体で考え方を共有する前に、二人組や小集団で考えを交換する時間を設け、自分の考えを自信をもって伝えることができるようにする。 ○図(具体物や数直線)、式、答えが正しく繋がるように板書を工夫する。 ○長さや時刻・時間、水のかさなどの新しい単位を、ふだんの生活でも触れることができるように配慮する。 ○授業でミライシードを使って学習に取り組ませることで習慣化し、自宅でも復習できるようにする。
第3学年	○自己解決に必要な図や計算式を黒板に書いたり、学習用タブレット端末・プロジェクタで自分の考え共有することができた。 ○習熟度別のグループ分けによって、自分の習熟度に合った学び方で学習を進められた。 ○一斉指導だけでなく、ペアやグループで児童同士で交流したり、問題解決をしたりする時間を確保できた。考え方を交流する時間を、意図的に設定し、小集団で自分の考えを自信をもって伝えることができることが課題である。	○計算力の個人差： 基礎的な計算力は身に付いているが、3年生で新しく学習する「わり算」や「かけ算の筆算」において、計算ミスや習熟度の個人差が見られる。 ○新しい単位や数への苦手意識： 小数・分数や、「km（長さ）」「kg（重さ）」といった日常生活でイメージしにくい新しい単位の量感をつかむことに課題がある ○説明することへの苦手意識： 図や式を使って自分で考えることはできても、その理由や考え方を友達に自信をもって伝える力が不足している	○計算原理の理解と定着： デジタル教材で筆算の仕組みを視覚的に示し、わり算やかけ算の筆算を正確に計算できるようにする。 ○実測を通した量感の育成： 小数・分数や新単位（km, kg）の指導で実測や比較を取り入れ、正しい量感を養うようにする。 ○図や式を用いた説明力の向上： 線分図や□の式で数量関係を可視化し、ペア対話を通して自分の考えを自信をもって説明できるようにする ○振り返りと解き直しの習慣化： 毎時間の振り返りとICTドリルを活用し、誤答を自力で最後まで解き直す態度を育てるようにする。
第4学年	○習熟度別のクラス分けによって、自分の習熟度にあった集団で学び合うことができた。 ○全体交流やペア対話の中で、再度説明し追体験をすることを通して、解法を身に着けて練習問題に取り組める児童が増えた。 ○立式の際、言葉・図・式を関連させることで、式の意味や答えの意味について考えられる児童が増えたが、応用問題や初見の問題を解くときに、既習事項を生かして問題を解くことに課題がある。	○既習の活用力不足： 基礎計算はできるが、応用問題で既習のきまりや図を自ら活用することに課題がある。 ○説明への苦手意識： 答えは出せても、図や式を根拠に考え方を説明することに苦手意識がある。 ○抽象的概念の定着： 大きな数や面積の単位換算、立体の作図などの理解に個人差が大きい。 ○解き直しの未定着： 間違えた原因を振り返り、自力で最後まで解き直す習慣が定着していない。	○計算の定着： デジタル教材で計算の仕組みを視覚的に示し、筆算を正確にできるようにする。 ○単位の感覚育成： 実際に測る活動を取り入れ、長さや重さの正しい量感を育てる。 説明力の向上： 線分図で考えを整理し、ペアで説明し合う時間を設ける。 ○解き直しの定着： 毎時間の振り返りとICTドリルで、自力で最後まで解き直させる。
第5学年	○１学期から継続して数直線や４マス関係表を用いて問題場面に出てくる数量を整理することを指導した。割合の学習では、問題文を読みながら整理して考えることができるようになった。 ○数直線や４マス関係表で問題に出てくる量を整理することで児童がスムーズな立式をできるようになった。 ○習熟度別のグループ分けによって、自分に適した学び方で学習を進められた。 ○自力解決の時間を確保することで、自身の考えが整理でき、発表への意欲につながった。 ○グループや少人数で考え方を伝え合う時間を作ることで、自分の考え方を広げることができるようになった。	○問題に出てくる量を整理するときに、数直線を用いない児童が見られる。 ○小数の筆算の習熟度（特にわり算）に個人差が大きい。 ○小数のわり算の筆算において、あまりと答えで打つ小数点の位置が違うことを忘れてしまっている、理解できていない児童が多い。 ○小数のわり算において、立式をする際、わられる数とわる数で混乱してしまう児童が多く見られる。 ○合っている自信がない児童が多く、発表する人が毎回同じ児童になってしまうことが見られる。 ○言葉での説明だけでなく、絵や図を用いて自分の考えを説明しようとする児童が多く見られる。	○数直線や４マス関係表の活用を徹底し、わる数とわられる数の関係を整理させて、正しく立式できるようにする。 ○デジタル教材等で小数点の移動や余りの位置を動的に見せ、つまずきやすい筆算を正確にできるようにする。 ○児童が書いた絵や図をペアで説明し直す活動を位置付け、誰もが自信をもって発表できるようにする。 ○振り返りと解き直しの習慣化： 学習アプリやつまずきに応じた個別支援を活用し、間違えを自力で最後まで解き直す態度を育てる。
第6学年	○授業の初めに前時の学習内容を確認することで知識の定着を図ることができた。 ○提示する問題を工夫することで、答えを導くまでの考え方や計算の方法を大切にし、問題を解くことができる児童が増えたが課題が残る。 ○ペアやグループで交流することで自信をもって伝えることができるようになった。 ○簡単な数字からスモールステップで学習を進めることで学習内容を理解できる児童が増えた。問題文の数字に線をひかせることで十分に理解することができた。	○既習事項を生かして、新しい学習内容に挑戦しようとする意欲的な姿が見られる児童がいる。 ○途中式を省略して誤った計算をする児童が見られる。 ○全体場面で挙手発言する児童が固定化しているが、個々のノートには自分の考えを書くことができている。 ○分数の乗除の計算技能が十分定着しておらず、計算の途中で約分をせずに大きな数のまま計算してしまい、誤答につながる児童が一定数見られる。	○分数の学習では、途中式を書くことや計算の途中での約分を徹底させ、分数の乗除などの計算ミスを防ぐようにする。 ○ノートに書いた考えをペアや端末で紹介し合う活動を取り入れ、発言の固定化を防ぎ、全員が安心して表現できるようにする。 ○前時の学習内容の確認やスモールステップでの提示を丁寧に行い、既習事項を使って新しい課題に挑戦できるようにする。 ○毎時間の振り返りで誤答の原因（式の省略や約分忘れなど）を自覚させ、自力で正しく解き直す習慣をつけるようにする。